

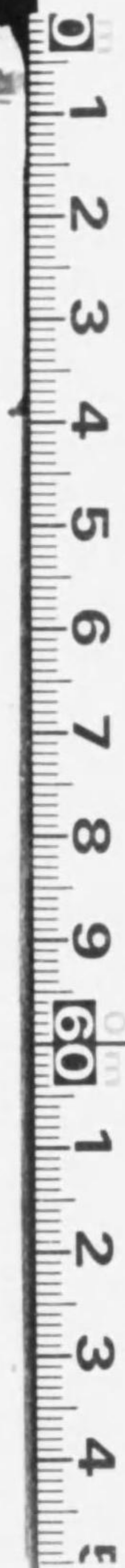
911.368
Mu71

911.368-Mu71



:200500756352

罕見死句集



始



911.368
M71

雪ふるといひし
ちりりれいと
つか
屋敷

963
87
84

序

ここに集めた發句は私の發句としてはその全部である。抹殺したのもかなりある。十八九歳の頃からの句もあれば五十を過ぎた句もあるが、發句で堂に入るといふことはもう私などには到底出來さうにもない、はるかに遠い道であつた。これからも私はふたたび堂にはいらうとは思はないものである。

發句ではただ一つの道をまもり、そこを歩きつゞけることができたかどうかとも問題である。私は一つの奥をさはめたことすら、甚だ覺束ないと考へてゐる。

目次

新年

新元初若お雑鍛買若松左

年日二日水り煮初初の義

四年二日一日水二煮一初一初長

句句句句句句句句句句句句

.....

三三三四四四四四四五五五五五五六

鶯 頬 蛙 歸 囀 水 春 春 陽 春 日 霞 麗 春

温 の

白 雁 り む 晝 愁 炎 埃 永 か 雨
一 一 一 一 一 一 二 二 一 一 二 三

句 句 句 句 句 句 句 句 句 句 句 句 句

二〇 一九 一九 一九 一九 一八 一八 一八 一七 一七 一七 一七 一六

春

雪 残 別 春 餘 呀 淡 春 春 春 立

れ 返 の の

解 雪 霜 寒 寒 る 雪 夜 日 山 春
二 三 一 四 六 五 二 二 九 一 二

句 句 句 句 句 句 句 句 句 句 句

一六 一五 一五 一四 一三 一二 一二 九 九 九

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 花 | 桃 | 櫻 | つ | 梨 | 菜 | 土 | た | 山 | 餅 | く | 芽 | 竹 | て |
| 散 | | | つ | | の | | ん | | | わ | | | つ |
| る | | | じ | | 花 | 筆 | ぼ | 吹 | 草 | ひ | | | せん |
| 三 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三 | 四 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| 三〇 | 三〇 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 | 二九 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 一 | す | 厥 | 下 | 木 | 落 | 梅 | 雛 | 若 | 鳳 | 畑 | 涅 | 蝶 | 春 |
| 人 | み | | | の | の | | | | | | 榮 | | の |
| 静 | れ | | 萌 | 芽 | 莖 | | | 草 | | 打 | 會 | | 鉢 |
| 一 | 五 | 一 | 三 | 二 | 三 | 二十二 | 四 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 四 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| 三〇 | 二九 | 二九 | 二六 | 二六 | 二七 | 二五 | 二三 | 二五 | 二二 | 二二 | 二二 | 二二 | 二〇 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 七 | 日 | 夏 | 蜻 | 蟬 | 夏 | 梅 | 白 | 短 | 著 | 夏 | 舂 | 涼 | 避 |
| | 盛 | | | | | 南 | | | | | | し | |
| 夕 | り | 瘦 | 蛤 | | 山 | 雨 | 風 | 夜 | さ | 書 | | さ | 著 |
| 二 | 三 | 一 | 一 | 五 | 三 | 二 | 一 | 一 | 三 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| 四六 | 四五 | 四五 | 四五 | 四四 | 四三 | 四三 | 四三 | 四三 | 四二 | 四二 | 四二 | 四一 | 四一 |

| | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|----|----|
| ゆ | や | 鮎 | 龍 | 炎 | 夏 | 夏 | 夏 | 夏 | 夏 | 行 | 晩 |
| と | ま | | 之 | | | の | | | | | |
| ん | め | | 介 | 天 | 晝 | 日 | 寒 | | | 春 | 春 |
| 一 | 一 | 二 | 三 | 一 | 一 | 一 | 二 | 一 | | 二 | 一 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | | 句 | 句 |
| 四一 | 四一 | 四〇 | 四〇 | 四〇 | 三九 | 三九 | 三九 | 三九 | | 三五 | 三五 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 秋 | 秋 | 夏 | 晚 | 晝 | 杏 | ぎ | 草 | 藤 | 葱 | 茨 | 芭 | あ | 芥 |
| 近 | | 名 | | | | ぼ | い | の | の | の | | や | 子 |
| し | 待 | 残 | 夏 | 顔 | | し | れ | 花 | 花 | 花 | 蕪 | め | 花 |
| 二 | 一 | 一 | 一 | 二 | 九 | 一 | 一 | 二 | 一 | 一 | 二 | 四 | 一 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| 五 六 | 五 八 | 五 七 | 五 七 | 五 七 | 五 五 | 五 五 | 五 五 | 五 四 | 五 四 | 五 四 | 五 四 | 五 五 | 五 三 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 石 | 若 | 青 | 櫻 | 竹 | 螢 | 蝸 | 水 | 蟻 | 馬 | か | ぼ | 夕 | 風 |
| 榴 | | | ん | の | | | | ち | | い | う | タ | |
| の | 葉 | 梅 | ぼ | 子 | | 牛 | 鶏 | ご | 蠅 | つ | ふ | 立 | 鈴 |
| 一 | 四 | 十 | 三 | 一 | 三 | 一 | 一 | 一 | 一 | り | ら | 一 | 一 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| 五 三 | 五 一 | 四 九 | 四 九 | 四 九 | 四 八 | 四 八 | 四 八 | 四 七 | 四 七 | 四 七 | 四 七 | 四 七 | 四 七 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 行 | 秋 | 夜 | 秋 | 冬 | 鱒 | 落 | 齒 | 柑 | 蘆 | 豆 | 茸 | 穂 | 枯 |
| | | の | の | の | | し | | | の | | | | |
| 秋 | 暮 | 秋 | む | し | 水 | 朶 | 子 | | 花 | | 薄 | 菊 | |
| 三 | 一 | 二 | 二 | 一 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 四 | |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 八〇 | 九 | 九 | 九 | 六 | 六 | 六 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 六 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 菊 | 返 | 水 | 鬼 | 南 | 栗 | 零 | 燕 | 小 | 萩 | 秋 | き | こ | 虻 |
| | り | 引 | | | | 餘 | | | の | | り | ほ | |
| | 花 | 草 | 灯 | 瓜 | 子 | | 春 | 花 | 蟬 | す | り | ろ | |
| 三 | 一 | 二 | 二 | 二 | 四 | 一 | 二 | 三 | 二 | 二 | 六 | 一 | 一 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| 五 | 五 | 五 | 四 | 四 | 三 | 三 | 三 | 三 | 二 | 二 | 〇 | 七 | 六 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 氷 | 寒 | 氷 | み | あ | 寒 | 寒 | 涼 | 時 | 冬 | 縮 | 冬 | 冬 | 糞 |
| 柱 | さ | 二 | れ | れ | り | 水 | る | 雨 | り | 三 | れ | 萌 | 三 |
| 三 | 七 | 二 | 一 | 二 | 一 | 一 | 一 | 十 | 三 | 三 | 四 | 三 | 三 |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 七 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| 100 | 九六 | 九六 | 九六 | 九七 | 九七 | 九七 | 九七 | 九七 | 九七 | 九七 | 九七 | 九七 | 九七 |

冬

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 深 | 行 | 師 | 冬 | 初 | 山 | 冬 | 短 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 冬 | 年 | 走 | 昔 | 冬 | る | 夜 | 日 | 雨 | 日 | 日 | に | 入 | |
| 八 | 四 | 三 | 三 | 一 | 一 | 一 | 四 | 三 | 六 | 三 | 三 | | |
| 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 | 句 |
| 八六 | 八六 | 八七 | 八六 | 八六 | 八六 | 八六 | 八五 | 八四 | 八三 | 八三 | 八三 | 八三 | 八三 |

犀星發句集

新

年

新年

新年の山見てあれど雪ばかり

新年の山重なりて雪ばかり

新年の山のあなたはみやこなる

新年の山巒に立つ烟かな

元日

元日や銭をおもへばはるかなる



元日や山明けかかる雪の中

初日

寒竹の芽の向き初日さしにけり

若水

若水や人の聲する垣の闇

お降り

お降りや新薬草ける北の棟

世を侘ぶる屋根はトタンかお降りす

雑煮

何の菜のつぼみなるらん雑煮汁

鍛初

鍛はじめ椿を折りてかへりけり

買初

買初の紅鯛吊す炬燵かな

若菜

若菜籠ゆきしらじらと疊かな

松の内

古き世の顔も匂ふや松の内

左義長

くろこげの餅見失ふどんどかな

坂下の屋根明けてゆくどんどかな

春

立 春

春立や坂下見ゆる垣のひま

春立や蜂のはひゐる土の割れ

春の山

朝 鮮

春の山らくだのごとくならびけり

春 日

竹の風ひねもすさわぐ春日かな

春の日のくれなんとして豆にえぬ

槍崎助が尾の道の鯛をおくれる返しに

鯛の尾のあみがさはねる春日かな

小島政二郎に

瓶の酒にいつか春日の移りけり

籠の戸に鴨いで入りつ春日なれ

はるびんに春の日させばうれしもよ

竹村君に馬鈴薯をねだりて

一俵の馬鈴薯ひらく春日かな

馬鈴薯に春日ふふみつ着きにけり

齒のうきてひと日の春をこもりけり

春の夜

春の夜の乳ぶさもあかねさしにけり

齒にあてる春夜てのひらほてるかな

淡雪

淡雪の寺々めぐりやつれけり

春もやや瓦瓦のはだら雪

冴え返る

今宵しかない酒あはれ冴え返る

冴ゆる夜のかつてに雪駄ならしけり

生きのびし人ひとりゐて冴え返る

筆えらぶ店さきにゐて冴え返る

枯枝のさきそろひゐて冴え返る

餘寒

ごみ箱のわきに炭切る餘寒かな

枝のとがりにさはるにあらぬ餘寒かな

ひなどりの羽根ととのはぬ餘寒かな

京都七條

ひそと来て茶いれる人も餘寒かな

京都四條

おほきにといひ口ごもる餘寒かな

日はありて餘寒しみぬく松葉かな

春寒

春寒や葱の芽黄なる籠の中

校正自嘲

春寒や渡世の文もわきまへず

春寒きとげのある枝おろしけり

木いちごの芽のさき枯れて春寒き

別れ霜

苗蘂をほどく手荒れぬ春の霜

残雪

残雪やかからたちを透く人の庭

金澤

藪の中の一町つづき残る雪

空谷山房

雪凍てて垣根のへりに残りけり

雪解

金澤黒川

石斑魚いすぢに朱あかいすぢがつく雪解かな

炭俵すすりに烏樟くわじやう匂におひ雪解かな

春雨

春雨はるあめや明けがた近き子守唄

枯草くさの中の賑にぎふ春の雨

睡たさよ筆ふでとるひまの春の雨

麗か

麗かな砂中のぼうふ掘りにけり

靴くつみがきうららかに眠りゐたりけり

霞

花杏はなあんずはたはた焼けばかすみけり

日永

金澤

はたはた干し日の永さを知る

春の埃

奉天

春埃はるあせ奉天ほうてんに来て虹を見し

陽炎

西新井村平木二六居

陽炎や手欄こぼれし橋ばかり

馬込村

葱の皮剥がれしままにかぎろひぬ

春愁

春愁に堪えず笑ひこかしたり

はるびんのみ寺よはるの祈なる

春晝

晝深く春はねむるか紙しばる

水温む

石露の莖起きあがり水ぬるむ

囁り

森をぬく枯れし一木や囁りす

歸雁

屋根石の苔土掃くや歸る雁

蛙

晝蛙なれもうつつを鳴くものか

頬白

頬白や耳からぬけて枝うつり

鶯

七日あまり鶯啼きてはる立ちぬ

春の鮓

子供らの尾籠の鮓みな生きてゐる

浮鮓の浮きも泳げる春日かな

鮓のぼる瀬すぢは花の渦となり

鮓の串日はみんなみにかたよれり

蝶

蝶の腹やさしくは見る齒朶の上

涅槃會

おねはんの忘れ毬一つ日暮かな

畑打

春蟬や畑打ねむき晝下り

凧

凧のかけ夕方かけて讀書かな

凧の尾の色紙川に吹かれけり

著 享

悼 亡

若くさの香の残りゆくあはゆきや

雑

ねこ柳のほほけ白むや雛の雨

あはゆきとなるひいな夕ぐもり

金澤川岸町

雪みちを雛箱かつぎ母の来る

母よりの贈物を得て

古雛を膝にならべて眺めてゐる

梅

教科書まとめしまひつ梅の花

井戸端で茶碗すすげり梅の花

梅が枝にしぐれかかりて莖漬ける

金澤川岸町

硝子戸に梅が枝さはり固きかな

紅梅もまじる雑木のほめきかな

遠つ峰の風ならん障子の梅うごく

紅梅さげしをみなに道をたづねけり

高柳眞三君に

梅に机を置き君が母老いぬ

まひら戸のつや見に寄るや梅の花

子供らや墨の手あらふ梅の花

庭さきやあさめしこげて梅うるむ

ぼろぼろの机買ひけり梅の花

藁屋根に斑ら雪見ゆ梅の花

障子張るや艶吹き出でし梅の枝

萩原朔太郎居

梅が枝にこそこの絲瓜も下りけり

梅の束もたらせてある茶棚かな

大森即事

潮ふくむ風匂ふ梅の朝かな

あさごとに梅おほぎ見しがうるみけり

みなさんによろしくといひ梅日和

梅咲きぬ仰ぎ見つあはれ日々のわれ

梅咲きぬ食ふ錢ありて美しき

うめと呼びしが粥をつくりてくれにけり

蔦の臺

枯笹や氷室すたれし蔦の臺

日だまりの茶の木のしげり蔦の臺

古垣の繩ほろと落つ蔦の臺

木の芽

空あかり幹にうつれる木の芽かな

深谷温泉

山深くなり芽立ちまばらなる

下 崩

柴焼いて下崩の風起りけり

下崩や薪をくづす窓あかり

少女らのむらがる芝生萌えにけり

巖

峠路やわらびたけてほうほうの山

すみれ

背戸べりに董ならびつ故山なる

竹の葉を迂る春日ぞ藪すみれ

湯ヶ島村落

壺すみれ茶をのむ菴しきにけり

澄江堂に

うすぐもり都のすみれ咲きにけり

旅 順

いつしかに旅順に莖匂ひけり

一人静

君が名か一人静といひにけり

てつせん

てつせんの花のぼりけり梅の洞

竹

病 中

藪中や石投げて見る幹の音

芽

藪 中

ほそほそと荒野の石も芽ぐみけり

くわゐ

慈姑の子の藍いろあたま哀しも

餅 草

餅草や砂渦の立つ曲り道

野田山村落

餅草の匂ふ蓆をたたみぬ

山 吹

みちばたの山吹はみな折られけり

山吹やもの思はするよべの雨

山吹に枯枝まじる餘寒かな

ふるさとや白山吹の町のうら

たんぼぼ

乳吐いてたんぼぼの莖折れにけり

たんぼぼの灰あびしまま咲ききけり

行く春や蒲公英ひとり日に驕る

士 筆

岸 川

瓦屑起せばほめくつくしかな

菜の花

辛し菜の花はすこしく哀しからん

梨

冬越えの梨うつくしや草の家

つつじ

曲水の噴上げとなるつつじかな

櫻

さくら木にさくら一杯につきにけり

桃

母より千餘送り來る

千 鏝 桃 散 る 里 の 便 り かな

長女登園

桃 つ ぼ む 幼 稚 園 ま て つ き 添 ひ し

花 散 る

花 あ は れ 泥 鱒 も あ そ ぶ 芥 沼

朝 ごと や 花 掃 き よ せ つ 齒 の いた み

ほ ろ ほ ろ と あ せ び の 花 の ち る 春 か

曉 春

金 澤

お そ 春 の 雀 の あ た ま 焦 げ に け り

行 春

「加賀手袖唄集」を讀む

行 春 や 版 木 に の こ る 手 毬 唄

金 魚 賣 出 て て 春 行 く 都 かな

夏

夏

夏あはれ生きてなくもの木々の間

夏 寒

夏寒や煤によごるる碓氷村

輕井澤

夏寒き白粥煮るや古火桶

夏の日

夏の日匹婦の腹にうまれけり

夏 晝

ひさかたの雨頬にめてつ夏晝かな

炎 天
炎 天 や 瓦 を す べ る 兜 蟲

龍之介忌

硝子戸に夕明りなる蠅あはれ

同

煤けむり田端にひらふ螢かな

同

足袋白く埃をさけつ大暑かな

鮎

鮎をやく山ざとならば寒からん

鮎の香のなまめしきままつきにけり
やまめ

信濃坂本町

とうふやややまめ生きゐる山笥

ゆとん

澁ゆとんくちなしの花うつりけり

避暑

避暑の宿うら戸に迫る波白し

涼しさ

輕井澤

風のない涼しさよしんと葉波立ち

鮎

鮎の石雨垂れの穴あきにけり

夏書

追分なる堀辰雄の宿

屋根瓦こけづく里の夏書かな

暑さ

暑き日や桃の葉蝕はる枝ながら

かくれ藻や曇りてあつき水すまし

赤蜂の交りながらも暑さかな

短夜

車中

近江らしく水光りゐて明け易き

白南風

白秋氏歌集「白南風」を読む

白南風や背戸を出づれば杏村

梅雨

穴あかりうごくものゐて梅雨あがり

梅雨ばれのきらめく花の眼にいたく

夏山

浅間山

山やけて天つ日くらしきりぎりす

焼けし後淺間に見ゆるやつれかな

夏の山干魚のまなこの光るかな

蟬

蟬一つ幹にすがりて鳴かずけり

朝ぜみの幽けき目ざめなしけり

ふるさとや松に苔づく蟬のこゑ

かたかげやとくさつらなる蟬のから

鎌井澤

山ぜみの消えゆくところ幹白し

蜻蛉

とんぼらの腹の黄光り大暑かな

夏瘦

夏やせと申すべきかや頬あかり

日盛り

日ざかりや廂にのぼるかぶと蟲

硯屏に日盛りの草うつりけり

信濃追分

屋根瓦こけにうもれつ日の盛り

七 夕

こよひ逢はざるべからず機織女

星と星と話してゐる空あかり

風 鈴

山ざとに風鈴きけばさびしもよ

夕 立

夕立やかみなり走るとなりぐに

ぼうふら

孤蓬庵

つくばいのぼうふらさへも古りにけり

かいつぶり

片山津温泉

波もない瀉がくれるよかいつぶり

馬 蠅

馬蠅の鏡をすべり飛びにけり

蟻ちごく

晝ふかく蟻のちごくのつづきけり

水 鶏

百田宗治に

水鶏なく里のはやねと申すべし

蝸 牛

蝸牛の角のはりきる曇りかな

螢

竹の葉の晝の螢を淋しめり

螢くさき人の手をかぐ夕明り

螢かご入日を移し哀れがる

竹の子

草庵別離

竹の子の皮むく我もしばらくぞ

櫻んぼ

さくらん坊の返し竹村君に

さくらごをたたみにならべ梅雨の入り

さくらごは二つつながり居りにけり

さくらごの籠あかるさよ厨口

青 梅

青梅や茅葺きかへる雨あがり

伊豆下田

青梅も葉がくれ茜さしにけり

朝拾ふ青梅の筈ぬれにけり

伊豆湯ヶ島

炭ついで青梅見ゆる寒さかな

金澤

青梅や築地くえゆく草の中

青梅や足駄をさせる垣の枝

青梅の腎うつくしくそろひけり

青梅も茜刷きけり腎のすぢ

竹村俊郎に

庭ごけやかごをこぼれる梅の數

白鳥省吾を訪ふ

青梅やとなりの檜葉もさし交す

若葉

澄江堂金澤を去る

山房の灯ひともらずなり若葉老ゆ

わらんべの漬もわかばを映しけり

をんなごの顔剃らせゐる若葉かな

くるわ廢れて松のみどりのもゆる也

岩村田にて

石榴の花

塗り立てのペンキの塀や花ざくろ

芥子の花

しら芥子や施米の榊にほろと散る

あやめ

金澤よりあやめを移し植えて

岡あやめ訪ふひとはみな乙女つれ

にさんちちむすめあづかりあやめ咲く

絲捲きに絲まかれゐるあやめかな

しほらしや鬼が島根のあやめ咲く

芭蕉

芭蕉玉巻のほる暑さかな

ひんがしに芭蕉の花の向きにけり
茨の花

澄江堂葛参

江漢の塚も見ゆるや茨の花
葱の花

伊豆街道

晝近き雨落着くや葱の花

藤の花

湯ヶ島

藤の花温泉どころの灯の見えにけり

やまめ焼く宿忘れめや藤の花

草いされ

鎌といへる飼犬のむなしくなれば

とらの子のとらの斑も見ゆ草いされ

ぎぼし

田端草庵

ぎぼし咲くや石ふみ外す葉のしげり

杏

あんずの香の庭深いふるさと

あまさ柔かさ杏の日のぬくみ

あんずあまさうなひとはねむさうな

あんずほたほたになり落ちにけり

あんずにあかんぼのくその匂ひけり

あんずあまさうな雑木の門がまへ

ほたほたの杏堪えきれず落ちにけり

杏おちる屋根板の干反り輝けり

となり家の杏落ちけり小柴垣

晝顔

晝顔に浅間砂原あはれなり

晝顔や海水あびに土手つたひ

晩夏

夏深く山氣齒にしむ小徑かな

夏名残

朝日さす町の埃や夏名残

秋 待

秋待や徑ゆきもどり日もすがら

秋 近し

秋近や落葉松うかぶ風呂の中

竹の幹秋近き日ざし沁りけり

秋 隣

あさがほや蔓に花なき秋となり

秋

立 秋

秋立つや齒の浮きとまる朝なさな

輕井澤

松かげや絲萩伏して秋の立つ

秋暑し

京都即事

犬も曳く粉屋ぐるまや秋暑し

秋の日

信濃假宿

沓かけや秋日にのびる馬の顔

秋の日や埃くもれる古すだれ

秋の月

月の夜は雑木もさわぐ風ならん

秋夕

さかさまに葉書かきゐて秋夕

秋もやや土のしめりの夕かけて

道絶えて人呼ぶ聲や秋夕

山中秋

山中やただにおもふも人のうへ

秋あはれ山べに人のあと絶ゆる

露

我が机置くとて

庭近く机つゆけきいとどかな

秋の野

秋の野よ家ひとつありて傾けり

秋の山

馬が蛇に乗つて出かける秋の山

秋めく

秋めくやとんぼうよぎる書庫の間

秋の水

秋水や蛇籠にふるふえびのひげ

空谷山へに

とんぼうや羽の紋透いて秋の水

桂離宮拜觀

すぎごけて織られてゐるよ秋の水

夜寒

鯛の骨たたみにひらふ夜寒かな

きりぎりす己が脛喰ふ夜寒かな

疊屋の薄刃を研げる夜寒かな

しの竹や夜さむに冴ゆる雨戸越し

風呂桶に犀星のゐる夜寒かな

龍之介

ふぐりをあらふ寝れなりけり犀星

秋の風

ひとりねの枕にかよへ秋の風

裏山や枝おろし行く秋の風

朝寒

朝さむや幹をはなるる竹の皮

玉菜の返し

菊なますみちのくの菊と見るからに

菊は白くしぐれ溶けあふ夕厨

秋人

石段を叩いてのぼる秋の人

秋の餅

秋の餅しろたへの肌ならべけり

身にしむ

身にしむやほろりとさめし庭の風

渡り鳥

茶どころの花つけにけり渡り鳥

いなご

ちんば曳いて蝗は縁にのがれけり

秋螢

山螢よべのあらしに消えにけり

焼砂に細るる秋の螢かな

山の井に螢這ひゐるやつれかな

いとど

行きもどり驛のいとどの絶えにけり

さんみやにこほろぎ鳴けど灯らざる

枕べのさかづきなめるいとどかな

蟲

こどもらは上野つきしか蟲すだく

秋あはれ啼く聲おさめ蟲のゐぬ

つゆくさのしほれて久し蟲の籠

あきつ

山みちをゆきつ戻りつあきつかな

蛇

山蛇の眼に透る茨かな

こほろぎ

短冊をやなぎやに賣りて

こほろぎや路銀にかへる小短冊

きりぎりす

輕井澤

きりぎりす夜明くる雨戸明りかな

きりぎりす思ひ堪えめや夜すがらを

夜のあかりととかぬ畝やきりぎりす

きりぎりす隣の白のやみにけり

明けかかる高窓ひくやきりぎりす

きりぎりす白湯の冷えたつ枕上

秋 蟬

輕井澤庭前

しらかばに蟬ひとつゐて鳴かずけり

あきぜみの明るみ向いて啞かな

萩の花

離亭にて縫物ひろげ萩の花

結婚せる人におくりて

萩すすきいかばかり萩は美しからむ

小春

塀ぎはに萌黄のしるき小春かな

小春日のをんなのすはる堤かな

小春日に堇も返り咲きにけり

燕

竹村君に

やまがたの王様燕ひかるがに

たまかぶら玉のはだへをそろへけり

零餘子

金澤池田町假寓

雨傘にこぼるる垣のむかごかな

栗

柴栗の柴もみいでて栗もなし

朝々や栗ひらふ庭も寺どなり

栗のつや落ちしばかりの光なる

庭前
いが栗のつや吐く枝や算口

南瓜

うちつれて南瓜あそべり秋の縁

縞ふかく朱^{あか}冴えかへる南瓜かな

鬼灯

ほほづきや廊近き子の針子づれ

鬼灯やいくつ色づく蟬のから

水引草

日の中の水引草は透りけり

みづひきのたたみのつやにうつりけり

返り花

水戸にて

瀉照りて櫻もかへり咲きにけり

菊

しみじみと思ふ菊白き日本

日本の頬うつくしや菊の前

小鳥といへる雁川の石をあつめて

小鳥に野菊もすこし縁の端

枯菊

菊枯れて茜めく葉の冴ゆるかな

鉢の菊枯れしがままの裏戸かな

しじみ汁菊枯れし宿の葎越

雑 七

枯菊の匂ひもあらず人ゆきぬ

穂 薄

青すすき穂をぬく松のはやてかな

茸

金澤百姓町

白菊や茸もある店の灯のもとに

豆の花

輕井澤

道のべは人の家に入り豆の花

蘆

片山津温泉

蘆も鳴らぬ鴻一面の秋ぐもり

柑子

金澤川御亭

秋の日や柑子いろづく土の塀

齒 朶

はれあがる雨あし見えて齒朶あかり

道芝に雨のあがるや齒朶明り

落し水

田から田の段々水を落しけり

鱒

鱒やく煙とおもへ軒の煤

冬近し

固くなる目白の糞や冬近し

秋 深 じ

堀辰雄・野朶を送り來る

秋をふかみいんげんの爪切りにけり

秋も深く炙すえあふて別れけり

夜半の秋

金澤池田町

隣間にいとどを捨つる夜半の秋

秋の夜半風起きて行く枝葉かな

秋の暮

馬の仔はつながでゆくよ秋のくれ

行 秋

秋ふかき時計きざめり草の家

象六公圖

雨戸しめて水庭を行く秋なれや

草古りてぼろ着てねまるばつたかな

冬

冬に入る

冬に入る玻璃戸を見れば澄めりけり

冬に入る手のあれしるき机上

冬に入る椿の葉つやまぶしかも

冬の日

ひよどりの瘖せ眼に立ちて冬日なる

冬日さむう蜉蝣くづれぬ水の面

冬の日や知らぬ町に来て人を訪ふ

枝に透いて鳥かげ迅き冬日かな

冬日暮れ女ひとり行き絶えにけり

冬日さすあんころの肌かはきけり

冬の雨

冬の雨ぬれ深むいささかの草々

冬の雨バンつけて傘返しけり

冬雨に炬燵櫓をはたくかな

短日

短日や夕にあらふ晝の椀

日短き道にひらひぬ子供本

短日や藪をひらいて家の建つ

短日や小窓に消ゆる魚の串

冬の夜

冬の夜の巷に鶴を飼ひなれし

山眠る

墨匂ふ漢の山々眠りけり

初冬

初冬や庭木に乾く薬の音

冬の苔

冬の苔きばみそめけり水の鉢

石ほとけ寺よりかりて冬の苔

冬苔に或ひは飛ばんとす何の蟲

師走

さいかちのこぼれこぼれつ師走かな

師走ひと日時計の埃はきにけり

霜よけの篠吹きとほす師走かな

行年

行年や炭かじる子のさむしろに

行年や懐紙をえらぶ市の中

行年や葱青々とうら畠

行年や笹の凍てつく石の水

深冬

冬ふかくほとけの彫りも見えがてに

あしの皮はぎおちる冬の深みけり

まるめろ一つ置いてある冬の床の間

笹にまじるあやめみどり葉冬深き

とくさまつすぐな冬のふかさよ

冬深き井戸のけむりよ朝まだき

冬深く萎えし花々幾日ぞ

干魚あぶる市中に来て冬深き

炭

これやこのむかしの炭のひと俵

炭の輪の隈とる縞は美しきかな

炭と梅馬とみ寺の驛さかひ

冬 萌

冬萌えのおちばすきまに冴ゆるかな

冬萌えの藍の花もつ何の草

冬萌えや茶の實をひろふ椀のかご

冬ざれ

いらぬ石かたづけにけり冬ざるる

冬ざるる豆柿のあまさとほりけり

冬ざれや日あし沁み入る水の垢

輕井澤の蟲、十二月に死にければ

籠の蟲なきがらとなり冬ざるる

鱒

梅もやや鱒あぶりてぬくとい日

干鱒おしいたたきてくらひけり

干鱒たやさぬ冬の深まりて

冬ごもり

障子には毛布つるしぬ冬ごもり

朝の茶はたれにまつらん朝ほがひ

烏瓜冬ごもる屋根に残りけり

しぐれ

しぐるるにあらぬあしおと絶えにけり

竹むらやややしぐるる軒ひさし

わが家には菊まだのこるしぐれかな

消炭のつやをふくめる時雨かな

つるやまでマツチもらひにしぐれかな

しぐるるや煤によごれし竹の幹

あしおとかあらぬしぐれの小屋根越

山あひに日のあたりゐるしぐれかな

菜をかかへ砂利もしぐるるたつきかな

金澤のしぐれをおもふ火桶かな

しぐるるとなきに茶はなき端居かな

菊焚いて鶯鳥おどろく時雨かな

隣寸すりて人を送れるしぐれかな

京都

来て見れば旅籠の庭もしぐれけり

鶏頭のくろずみて立つしぐれかな

入浴や地圖ひろげゐる初時雨

大宮に遊ぶ

しぐるるや飴の匂へる宮の内

涼る

波こぼる隅田を見しよ町のあひ

寒の水

寒の水寒餅ひたしたくはへぬ

寒ぐもり

寒ぐもる下枝にひそむ雀かな

あられ

しんとする芝居さい中あられかな

水仙の芽の二三寸あられかな

みぞれ

しめなはの北なびきするみぞれかな

氷

まんまるくなりたるままの氷なり

潦にごれるままに氷りけり

寒さ

ふるさとに身もと洗はる寒さかな

松風の奥に寺ある寒さかな

しろがねもまぜて錢ある寒さかな

壑谷山人に

あるじ白衣の醫に老ゆ寒さかな

魚さげし女づれ見し寒さかな

しんとして音なく更ける寒さかな

この寒さはじき飛びけり杉の枝

氷柱

つらら折れるころ向く机かな

ひるすぎの笕つららを滴りにけり

さびしく大きいつららをなめて見る

木枯

木がらしや人家の絶えし畝の跡

霜

燐寸買ふ霜ふけし家の葎かな

栗うめて灰かぐはしや夜半の霜

竹の葉の垂れて動かぬ霜ぐもり

きざ柿のしぶのもどれる霜夜かな

暮鳥忌

暮鳥忌の書屋の埃はらひけり

朝日さす忌日の硯すりにけり

わびすけ

わびすけにみぞれそそぎて幹白し

わびすけのくちびるとけて師走なる

疊替わびすけに針はこびゐる

枇杷の花

枇杷の花母娘と住みてなまめしき

笹鳴の渡りすぎけり枇杷の花

枇杷の花ちぢれる家を越しにけり

炬燵

山中温泉

庭石の苔を見に出る炬燵かな

莖漬

莖漬や手もとくらがる土の塀

莖漬やさざんか明る納屋の前

鹽蛙

鹽蛙をねぶりても生きたきわれか

牡 蠣

菊枯れて牡蠣捨ててある垣根かな

焼 芋

焼芋の固きをつつく火箸かな

林 檜

螢めく奥羽りんごの明りかな

暖 爐

ほほえめばえくほこほるる暖爐かな

珈 珈

地圖をさし珈琲實る木をおしへけり

水 涕

水涕や佛具をみがくたなごころ

北窓閉す

豆柿の熟れる北窓閉しけり

槽

そのなかに芽を吹く槽のまじりけり

冬がまへ

飛驒に向ふ軒みな深し冬がまへ

寒 餅

寒餅やむらさきふくむ豆のつや

寒餅や埃しづめるひびの中

寒の明け

霜にこげし松の黄ばみや寒の明け

枯野

植木屋を

石負うて枯野に人のおはしける

草枯

大森新居

佗び住むや垣つくろはぬ物の蔓

犀川

野いばらの實のいろ焦げて残りけり

草の戸や蔦の葉枯れし日の移り

草枯や時無草のささみどり

鴨

けふよりぞ冬をかこへり池の鴨

雪

鶴石先生別荘

雪のとなり家はかなりやのこゑ

羽ぶとん干す日かげ雪となる

かはらの雪はなぎさから消える

ゆきぐにの漬菜きほへり菰の中

毛皮

毛皮まくあごのたまたまひかりけり

ゆきふるといひしばかりの人しづか

寒鮎

寒鮎のうごかぬひまも日脚かな

はたはた

天外先生に

梅固くはたはたぶりことどきけり

鱈

蘘菔や在所にもどる鱈のあご

干鰯

近松先生に

干鰯まゐらすほどの春ならし

冬の蝶

故郷に草房をゆめ見て

冬の蝶風の里に飛びにけり

干栗

綿入に干栗はさみ到きけり

蟹

紅波甲といへるは東京の蟹くらゐある酒のさかなによろしき蟹也。金澤の家兄より送り來しその返しに

紅波甲や風ぎしみやこも北の海

手袋

空谷山房にて

鉢梅にあかいてぶくろぬいてある

たまゆらや手ぶくろを脱ぐ手のひかり

笹鳴

日もうすれ閉まる家ぞ笹鳴す

笹鳴や落葉くされし水の冴え

山吹の黄葉のちりぢり笹鳴す

大森即事

笹鳴や馬込は垣も斑にて

山茶花

薬ぬれて山茶花残る冬の雨

山茶花に算ほそるる日和かな

山茶花や日のあたりゆく軒の霜

冷かや山茶花こぼる庭の石
梅もどき

川御亭

梅もどきの洗はれてゐるけさの雪

冬木

目白籠吊せばしなふ冬木かな

寒菊

金澤と別る

寒菊の雪をはらふも別れかな

消炭に寒菊すこし枯れにけり

冬すみれ

北原會別庭

石垣に冬すみれ匂ひ別れけり

石垣のあひまに冬のすみれかな

落葉

坂下の屋根みな低き落葉かな

落葉ふんで犀星の行く小徑かな

草野氏

どんぐりならばとんぼかへらむ犀星

干菜

足袋と干菜とうつつる障子かな

靴

靴音はをんならしくも霜夜なる

春待

春待やまなかひの手の照るを見つ

妻病む

春待や生きのびし人の息づかひ

春待やうはごとまじる子守唄

春待や漬け残りたる桶の茄子

串柿のほたほたなれや春隣

春待や花もつ枝の艶ぶくれ

春待や山吹の枯枝がすぐりつつ

春近し

朝ぬれし雨の枝々春近し

雜

銃 後

銃後のあさゆふの心おさへつつ

銃後に燦としておとづれる刃のひかり

勝 とき

勝どきのひとびとの頬の照りにける

勝どきのかたきいひをばかみしめつ

つゆしもの荒みかちどきを擧げ

天つ日のかちどき餅をつきにけり

かちどきの餅つき居れば日はのほり

禱

戦ひの庭はき清めゐたりけり

まなかひの艦の怒りのとほりけり

まなかひに艦もりあがり天かける

まなかひに艦のかかやき鶴の如し

くろがねの艦天ぞらにはしりけり

艦はみなもとせの怒りととのへり

艦に月さしのほり艦はしろたへ

つるぎ

つるぎ研ぐまひら戸のつやにしぐれけり

白菊やつるぎ研ぐ家のひとところ

つるぎ研ぐ白きにごりも冬に入る

配給元 東京神田淡路町二ノ九 日本出版配給株式会社

昭和十七年五月二十日印刷

定價三圓

昭和十七年五月二十五日發行

著作者

室生犀星

發行者

櫻井均
東京市小石川區大塚町三十三

印刷者

長谷川隆士
東京市板橋區板橋町三ノ六四

發行所

櫻井書店
東京市小石川區大塚町三十三
會員番號 一一〇三五號

出文協承認 ア220359號

2,500部

968
84

終

櫻井書店